

日本語教育における 構成的グループ・エンカウンターの応用

— ディスカッション「大学を10倍楽しくする方法」—

境 智 美

1. はじめに

「日本語を聞くこと、話すことが難しい。日本人に会うとき、とても心配です」中国で日本語を学び、日系の会社に就職した中国人男性の言葉である。このような悩みをもつ者は少数派ではなく、日本語能力試験N1に合格していても、自身の会話力に不安をもつ者は多い。言語教育の最終目標が目標言語でのコミュニケーションとするならば、話す力を育てていくことをもっと重視する必要がある。また、日本人にとっても、国際化が急激に進み様々な文化的背景をもつ人々とのコミュニケーションが求められている現在、自分の意志を明確に伝えていく力が必要である。話す力を育てていくことは、日本語学習者のみならず、日本人にとっても必要なことである。

1970年代の初頭に誕生し、発展してきたコミュニカティブ・アプローチ（Communicative Approach：以下CA）は言語の構造や型よりも意味内容を最優先し、コミュニケーション能力を養成することを目標としている。しかし、林（2008）は「日本語教育におけるCAの必要性が説かれているが、残念ながらその座標軸と明確な方法論を欠いたまま、かけ声ばかりが独り歩きしている」と述べている。「コミュニケーション能力は実際のコミュニケーション活動を通して育つ」というCAの理念は理解できるが、教師は実際の教室活動を計画するに当たって、日々接する学習者を見つめながら方法やテクニックを模索している。さらに、現代社会では人間関係が希薄になり、他者と関わることを億劫がったり、不安や抵抗感を感じたりするという現象が教室内でも見られ、活動を難しくしているという場合もある。

構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter：以下SGE）はコミュニケーションを重視し参加体験型の活動であるという点でCAと共通しており、話す力を育てるのに適している。さらに、人数・時間・内容等が構成されているため授業に取り入れやすい。また、人間関係作りにも有効であることから、話す活動の活性化が期待できる。

本稿では、日本人学生と留学生が共に学ぶクラスで、「話す力」を育てるためにSGEのエクササイズを応用したディスカッションを実施し、その効果と問題点を明らかにする。学習者が楽しんで活動に参加し、話すことへの不安や抵抗感を軽減させ、話す力が向上することを期待する。

2. 先行研究

2-1. 「話す力」の向上を目的としたディスカッション

ディスカッションは、日本語では「討論」「討議」と訳される。「討論」が、特定の場で互いの意見や論を戦わすことであるのに対し、「討議」は、意見を交わし、いろいろと検討を重ねることによって最終的になんらかの結論、決議に導こうとすることである。(goo辞書) 本稿では、前者を「意見交換型」、後者を「合意形成型」と呼ぶことにする。

「話す力」の向上を目的とした研究として、木田ら(2007)は、ディスカッション活動に必要な話す力を「話の流れを作ったり、発言の順番を取るなどの談話能力、相手に効果的に意見を伝える社会言語能力、うまく理解できなかったときに聞き返したり、発言の調整を求めたりするといったストラテジー能力」としている。

村上(2012)は、「社会に出て大切なことは他者と円滑な関係を築くことであり、合意を形成するための技術が重要かつ必要である」という問題意識から、留学生対象日本語クラスで、合意形成型のディスカッションの取り組みを行っている。具体的には、筋道を立てて考えを説明する練習や意見を整理・統合する練習を事前に行った後、ディスカッション大会を行い、必要な技術を中心に論じている。

黄(2012)は、話すことに関するSGEの実践研究の中で、インタビュー、スピーチ、ディスカッション、ロールプレイという言語活動形式を用いたエクササイズを行っている。ディスカッションについては、制限時間内に話す力や要約力の向上を目指して、意見交換型のペア・ワークを行い、授業の実態を明らかにしている。

本稿では、村上(2012)と同様の問題意識から、合意形成型のディスカッション活動を行い、黄(2012)の研究手法を参考にしながら、SGEのエクササイズをディスカッション活動として応用することの効果と課題を、従来のタスクとの比較という視点も入れて検討を試みる。

2-2. SGEについて

SGEは1970年代後半から國分康孝・國分久子らによって提唱・実践され始めたものである。國分(1981)は「エンカウンターとは何か。心と心ころのふれあいである。ホンネとホンネの交流である」と述べている。参加者はエクササイズを通して、ホンネとホンネの交流を味わう。エクササイズの展開における特徴は、まず、人数、時間、内容などの枠があることである。それによって自己開示が促進され、時間は有限であるという現実原則を体験できる。さらに、「役割遂行」や「シェアリング」という特徴がある。集団の中で役割が与えられることは自分の居場所が与えられることにもなり、役割を介することで、抵抗なく人と接することができる。また、エクササイズ実施後に行うシェアリングでは、参加者同士がお互いにどのような気づきや感想をもったかを振り返り、分かち合うことで、認知の修正や拡大を行うことができる。

このような特徴をもつSGEエクササイズには、話す活動を取り入れたものが多く、自分の考えを自分の言葉で表現するプロセスがある。ディスカッション形式のものとしては、登村(1999)が、小学校高学年から、高校生を対象に6人程度のグループで行うエクササイズ「学校を10倍楽しくする方法」を開発している。本エクササイズは、登村(1999)のエクササイズ

を大学における日本語授業のために、4人グループでの合意形成型ディスカッションにアレンジしたものである。また、本稿ではSGEの理念に基づいているということを明確にするためにSGE用語を用いているが、「エクササイズ」は日本語授業における「タスク」、「参加者」は「学習者」、「リーダー」は「教師」に対応している。

3. 研究方法

エクササイズ終了時に、参加者が記入する振り返りシートには、各設問に「よくあてはまる(5点)」～「まったくあてはまらない(1点)」の5件法で答えるものと自由記述欄を設けた。5件法で答える各設問の内容は以下の9項目である。()内は各設問を簡略化した表示である。

- ①楽しんでエクササイズに参加できた(楽しい)
- ②積極的に話すことができた(積極的)
- ③自信をもって話すことができた(自信)
- ④相手を意識しながら、伝えたいことを伝えることができた(伝える)
- ⑤相手の話に適切な受け答えができた(受け答え)
- ⑥筋道を立てて話すことができた(筋道)
- ⑦状況に応じて臨機応変に話すことができた(臨機応変)
- ⑧自分なりに工夫して話すことができた(工夫)
- ⑨今日のエクササイズは自分の話す力を伸ばすために役立った(役立つ)

以上の各項目に対する参加者の評価をグレード・ポイント・アベレージ(Grade Point Average: 以下GPA)式に算出した。その際、小数点第3位を四捨五入した。また、自由記述に関しては、質的研究による分析を行った。本稿では、参加者からの記述データをほぼ一文ずつに切片化し、所属、属性および内容を簡潔に表すラベルを付け、概念ごとにまとめてカテゴリー化し、談話分析を行った。その際、個人的な関心や思い込みに左右されないように、内容検討グループ内で検討を加えていった。さらに、カテゴリー同士の関係をとらえた概念図を作成して、参加者の行動や意識の関連の分析を試みた。

4. 実施内容

テーマ: ディスカッション「大学を10倍楽しくする方法」

実施日時: 2012年6月26日(火) 3・4時限 「日本語論演習」(大学院生対象)

2012年7月3日(火) 5・6時限 「日本語学特殊講義」(学部生対象)

実施対象: 参加者合計33名(日本人17名、留学生16名)

ねらい: ①自分の意見の説明や弁明ができる。

②他者の意見を聞いて、自分の意見との一致点をさがすことができる。

③自分なりに工夫して話すことができる。

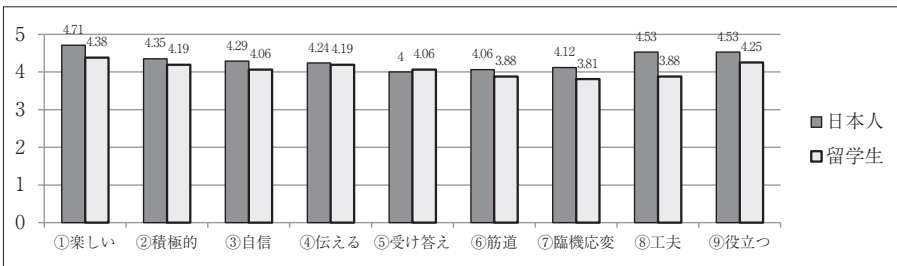
実施手順: (所要時間約50分)

①エクササイズのねらいや手順について説明する。

- ②二人一組のペアをつくる。
 - ③ワークシートの質問について、考えてきたことをペアで確認し合う。(3分)
 - ④四人一組のグループをつくる。
 - ⑤グループ名と役割(司会、発表者、書記、タイムキーパー)を決める。(3分)
 - ⑥グループで「大学を10倍楽しくする方法」についてディスカッションし、全体に提案したい1つの方法に絞り、提案理由や実現方法についてまとめる。(10分)
 - ⑦グループの考えを、全体に提案できるようにワークシートに記入する。(3分)
 - ⑧グループごとに全体で発表してもらう。
 - ⑨グループでシェアリング(3分)をした後、全体でシェアリングをし、各自振り返りシートに記入する。
- * テーマとワークシートの質問(別添資料参照)については事前に知らせ、考えをまとめておくように指示した。

5. 参加者の5件法による評価の分析

エクササイズに対する参加者の5件法による評価結果を、日本人と留学生とに分け、以下の<図1>に示す。



<図1>エクササイズ「ディスカッション」に対する参加者の評価

日本人、留学生に共通する上位3項目は①「楽しい」⑨「役立つ」②「積極的」であった。①②の評価が高いことから、参加者は楽しんでエクササイズに参加し、話すことへの不安や抵抗感は少なかったと思われる。また、自分の話す力を伸ばすために役立つと評価していることから、本エクササイズを日本語の授業へ取り入れる価値があると考えられる。日本人は全項目で4ポイント以上の評価値となったが、留学生は⑥「筋道」⑦「臨機応変」⑧「工夫」が4ポイントを下回っていた。特に⑧「工夫」は日本人と0.65ポイントの差が出ている。本エクササイズは、「大学を10倍楽しくする方法」についてディスカッションし、全体に提案したい1つの方法を決めるという合意形成の過程が含まれている。留学生は④「伝える」は4ポイントを超えていることから、難易度が高かったのは、意見をまとめていく合意形成の部分であり、項目⑦⑧の評価値の低さに影響していると考えられる。しかし、日本人の⑧「工夫」の評価は高く、合意形成という課題があったために、話し方の工夫をしようとする意識が高まったと思われる。

6. 参加者の自由記述の分析

振り返りシートの自由記述の内容を、戈木(2008)の「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を応用してカテゴリ化し、分類したものを<表1>から<表9>に示した。表中の参加者の所属と属性は、以下に示す略称を用いた。番号はデータ入力順番を示し、人物を特定するものではない。同一人物の記述を分けて入力する場合は、()内に連番で示し、また、一文しか記入していない場合でも01(1)のように示した。データは一文を基本単位とするが、一文で内容が分かりにくい場合は前後の文を合わせて示した。

[所属の略称]

日文：人文学部日本語学・日本文学コース／英文：人文学部英語学・英米文学コース
 言情：人文学部言語情報学コース／欧文：人文学部ヨーロッパ言語・文学コース
 社会：人文学部社会学コース／人研：人文科学研究科／東研：東アジア研究科
 研究：外国人研究生／交換：特別聴講生

[属性の略称]

中：中国／台：台湾／韓：韓国／米：アメリカ／M1：大学院修士1年
 M2：大学院修士2年／D1：大学院博士1年

6-1. エクササイズの評価について

エクササイズの評価に関する自由記述のデータを、以下の<表1>「楽しさ」<表2>「役立つ」の各カテゴリにまとめた。表右上の(n=○)は切片数を表す。また、データ内の誤用については()内に訂正して示した。

<表1> 「楽しさ」 カテゴリ

(n=12)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
22(1)	韓国の大学生活と比較することができて、楽しかったです。	交換	男(韓) 20代	意見を比較する楽しさ
18(1)	ぜんぜん気づけなかったことに気づくなって(→ようになつて)うれしかったです。	交換	男(韓) 20代	新発見のうれしさ
23(2)	話し合う中ではみんなが同じことを考えていたりしたことが分かって、意見を絞ることも楽しくできました。	交換	女(韓) 20代	同じだと知る楽しさ
10(4)	その一方、相違点にも気づいたりして面白かったです。	日文 3年	男(日) 20代	相違点を知る面白さ
26(2)	しかし、協力してこのグループはみんなのことを詳しく表してエクササイズが出来たので、楽しかったと思う。	交換	男(米) 20代	協力して話し合う楽しさ
23(1)	4人組で大学を楽しむ方法を考えましたが、自分の意見を聞いて「楽しそうだ」と言ってもらえたり、他の人の意見からおもしろそうな意見が出たりしてすごく楽しくエクササイズができました。	交換	女(韓) 20代	肯定的反応・意見を聞く楽しさ
15(2)	こんなことになつたらいいなと考えるのは楽しかった。	社会 2年	女(日) 20代	テーマの楽しさ
12(2)	また、グループの中でも同じような意見が出ていたので、話しやすかったけど逆に同じような意見が多くおもしろみがないにも感じた。	日文 2年	男(日) 20代	同じような意見の面白味のなさ

(以下4件省略)

「楽しさ」に関する記述は12件得られた。プラス評価が11件、マイナス評価が1件であった。ここでは「うれしい」「面白い」という感情表現も「楽しさ」につながるものとしてとらえた。「楽しさ」の要因を見てみると、まず一つは、「様々な意見を聞くことができた」ということである。22(1)は「自国の大学生生活と比較できて楽しかった」と述べている。日本人と留学生が同じグループで話し合うことの効果であり、異文化理解につながる記述である。18(1)は、「新発見があったこと」をあげており、それによって認知の修正・拡大が行われたと考えられる。23(2)は「同じ考えをもっていることを知ることができたこと」10(4)は「相違点に気づいたこと」をあげている。いずれも自己理解、他者理解につながる記述である。二つ目は26(2)の「協力してディスカッションができた」ということである。合意形成型ディスカッションでは、より協力的な態度が求められる。ディスカッションの技能として重要なポイントの一つである。三つ目は23(1)の述べている「他者の肯定的な反応」である。四つ目は「テーマ自体の楽しさ」である。15(2)は「こんなことになったらいいなと考えるのは楽しかった」と述べている。ディスカッション活動を計画する場合、身近でポジティブなテーマから始めるのもディスカッションへの抵抗感をなくす一つの方法だと思われる。

マイナス評価として、12(2)は「同じような意見が多くおもしろみがないようにも感じた」と述べている。SGEのシェアリングでは同じエクササイズを体験しても、メンバーそれぞれ受け取り方が違うことを知ることがある。このような他者との相違から自己概念が明確化され、自己理解が促進するとされる。

<表2> 「役立つ」 カテゴリー

(n=5)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
09(1)	自分がただ漠然と、こんなことをしたい、こうしたら楽しくなるのに…と思い描いているだけでなく、グループで話し合うことで少しずつイメージが具体化していきることができました。	英文 3年	女(日) 20代	話し合いによるイメージの具体化
29(1)	あるテーマをめぐって皆が話し合った。今日は自分が発表者として、自分の発想とグループ内の意見とどうやって整理するか、そして、整理した結果をどうやって皆さんに伝えるかという点が気に入った。練習する価値があると思う。	人研 M1	男(中) 20代	「意見の整理」「伝える」の練習価値
13(2)	授業内でもっとコミュニケーションをとれるような対話やプレゼン形式にしたり、学生がいつもと同じ席じゃなくて違うところに座って、となりの人に話しかけてみるなどなど、方法はたくさんあると思う。ただみんな勇気がでなかつたりするので、そういう点では、情報の共有や円滑さは大切になってくるかと思った。	社会 2年	女(日) 20代	情報共有や円滑なコミュニケーション

(以下2件省略)

「役立つ」に関する記述が5件得られた。09(1)は、話し合う過程が自分の考えをより具体化していくことに役立つと気づいている。29(1)は、グループ内の意見を整理し合意を形成していくこと、さらに結果を全体に伝えることは練習する価値があると述べている。つまり、実生活に役立つということであろう。実際、大学の授業の中でディスカッションは行われており、また、就職活動でグループ・ディスカッションを体験した者もいる。13(2)が述べているのは、普段の授業でもコミュニケーションをとる方法はたくさんあると思うが、勇気が出ずになかなか難しい。そのため、互いの情報を共有することや、円滑なコミュニケーションの場は大切で

あるということであろう。そういった点で、本エクササイズの評価を認めていると思われる。

6-2. ディスカッション・発表の技能について

ディスカッション・発表の技能に関する自由記述のデータを、以下の<表3>「合意形成の難しさ」<表4>「合意形成の工夫」<表5>「全体発表」<表6>「ディスカッションの進め方」の各カテゴリーにまとめた。

<表3>「合意形成の難しさ」カテゴリー

(n=5)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
03(2)	また、グループの中で出た意見が全くバラバラで考えをまとめて1つの意見にするというのが難しかったです。	日文 3年	女(日) 20代	1つにまとめる難しさ
26(1)	もっとも難しいところは、みんなはいい考えがありましたので、一つしか選ばないことです。	交換	男(米) 20代	1つを選ぶ難しさ

(以下3件省略)

「合意形成の難しさ」に関する記述が5件得られた。03(2)は「考えをまとめて1つの意見にするというのが難しかった」と述べている。26(1)は「1つしか選ばない」という表現をしているが、合意形成は1つの意見を選ぶということではなく、一見バラバラに見える意見に一致点を見出し、まとめていくことである。他にも同様の記述が2件あり、いずれも留学生の記述であるため、「選ぶ」をどのような意味合いで使用しているのかフォローアップインタビューが必要などであった。合意形成は、グループとしてどのように意見をまとめたらよいか、工夫や臨機応変さが求められる難しい部分であったと言える。

<表4>「合意形成の工夫」カテゴリー

(n=4)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
05(4)	あとは4人で話して前で発表したことですが、3人しか問題意識をもっていないことだったので、もう少しおりあいをつける点の吟味は必要だったのではないかと考えました。	日文 3年	女(日) 20代	同意の必要性
06(1)	なかなかまとまった考えが出てこなかったが、4人で話し合う中で互いの共通項を発見し、それを追求することで提案という形にまとめ上げることができた。	欧文 3年	男(日) 20代	共通点の追求
27(1)	最初グループのメンバーがそれぞれの意見を提出した。意見が違うけどつながりがある。このつながりによってグループの意見の提案を提出した。	研究	女(中) 20代	意見のつながり

(以下1件省略)

「合意形成の工夫」に関する記述が4件得られた。05(4)は、「3人しか問題意識をもっていないことだったので、もう少しおりあいをつける点の吟味は必要だった」と述べている。内容に一致点を見出すことが難しい場合、同意を得ることの必要性がでてくるが、それが曖昧だったことを反省している。斎藤(2004)は、「チームとして全体が機能するように意識して動くのが、ディスカッションの基本姿勢である」と述べている。

06(1)、27(1)はどのように合意形成を行ったかについての記述であり、ディスカッションを

進めていく過程で、お互いの意見に共通点やつながりを見出し、まとめることができたとしている。エクササイズのアラウド思考で説明した「他者の意見を聞いて、自分の意見との一致点をさがすことができる」というねらいにつながる記述である。

＜表5＞「全体発表」カテゴリー

(n=4)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
03(1)	私は発表者として発表を行いました、内容を上手くまとめることができなかったと思います。	日文 3年	女(日) 20代	内容をまとめる難しさ
11(1)	今回初めて前に出て皆さんの前で発表しましたが、筋道を立てる、臨機応変に話すという点が上手くできなかったと思います。	日文 2年	女(日) 20代	筋道、臨機応変の難しさ
20(3)	そして、筋道を立てて発表することができなかったのも、意見をしっかりとまとめる訓練をしないとけないと思いました。	交換	男(韓) 20代	訓練が必要
11(2)	まだまだ人前で話す経験が足りていないと感じました。	日文 2年	女(日) 20代	経験不足

「全体発表」に関する記述が4件得られた。03(1)、11(1)、20(3)は「内容を上手くまとめる」「筋道を立てる」「臨機応変に話す」という点が上手くできなかったと述べている。本エクササイズでは、クラス全体への発表の前に、グループの考えをワークシートに記入する時間を確保した。ワークシートは発表の手助けにはなかったと思われるが、より説得力のある発表にするためには、上記のような技能が必要であると参加者は感じている。20(3)、11(2)では、上手くできなかったという反省が訓練や経験の必要性につながっている。

＜表6＞「ディスカッションの進め方」カテゴリー

(n=2)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
10(1)	今日は司会という役割でしたが、グループ全体をまとめなければならぬので、難しかったです。	日文 3年	男(日) 20代	司会の難しさ
05(3)	とはいってもよくない所はたくさんあったと思います。まずは時間管理ですが、自分が何分話していたかわかりません。そのあたりはもっと気にかけるべきだったかなと思います。	日文 3年	女(日) 20代	時間管理

「ディスカッションの進め方」に関する記述が2件得られた。10(1)は司会としてグループ全体をまとめる難しさを述べている。合意形成を目指すディスカッションでは「司会」という役割は重要で、技術が必要である。05(3)は自分の発言時間を意識しなかったことを反省している。SGEの特徴は「枠」の設定であり、主たる枠の1つに「時間制限」がある。05(3)の記述は、今後に生かされることが期待できる。

6-3. ディスカッション内容から生じた参加者の意識・感情について

ディスカッション内容から生じた参加者の意識・感情に関わる自由記述のデータを、以下の＜表7＞「共感・発見」＜表8＞「提案実現への願望・意見」＜表9＞「コミュニケーションへの気づき」の各カテゴリーにまとめた。

<表7> 「共感・発見」 カテゴリー

(n = 10)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
15(1)	やっぱり大学生だから考えることは同じだと思った。人文は他の学部よりもタテのつながりがないと感じていたのは自分だけじゃなかったので安心した。	社会 2年	女(日) 20代	同じで安心した
04(2)	自分のグループで採用されなかった案が他のグループで採用されていたので、同じようなことを考えているんだなということを感じました。	英文 3年	女(日) 20代	同じような考え
02(1)	授業時間などは国によって違うので、留学生の意見としては授業時間を短くしてほしいなどが出て、文化の違いを感じました。	言情 3年	女(日) 20代	文化の違い

(以下7件省略)

「共感・発見」に関する記述が10件得られた。9件は、自分と他者との間に同じような考えを見出し、「共感」につながる記述である。15(1)は、「自分だけじゃなかったので安心した」と述べている。他者が何を感じ、何を考えているのか分からないとき、人は不安になり自己を開くことはできない。SGEのエクササイズは非日常の場で自己開示し、本音と本音の交流を促すため、自分だけの思いから解放され相手を共感的に理解する場となり得る。それによって参加者間の話が深まっていくことが期待できる。04(2)は、「自分のグループで採用されなかった案が他のグループで採用されていたので、同じようなことを考えているんだなということを感じました」と述べている。「採用されなかった」という表現から、合意形成の仕方に問題を感じるが、全体発表を聞くことで同じ考えを見出し、自分の意見を肯定できたと考えられる。02(1)は「発見」の記述であり、留学生の意見を聞いて文化の違いを感じている。留学生と日本人を交えたグループでのディスカッションでは、新しい考えや価値観に触れるチャンスが多い。

<表8> 「提案実現への願望・意見」 カテゴリー

(n = 8)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
14(2)	自分たちの考えを実現するためのおもしろプロジェクトも興味を持ちました。	欧文 2年	女(日) 20代	実現への興味
09(2)	ここでこのディスカッションを終わらせるのではなく、これからに生かしていくことが大切だと感じます。	英文 3年	女(日) 20代	今後に生かすことが大切
24(1)	私の大学には、インターネット討論場があります。(中略) 山口大学にも学生たちが気軽に声を出せる機会があればいいと思います。	交換	女(韓) 20代	意見を出せる場の必要性
30(1)	ペア、グループでディスカッションした。(中略) 外側的な影響は大きいですけど、自ら変えればもっと楽になる(→楽しくなる)かなと思っています。	交換	女(中) 20代	自らを変える必要性

(以下4件省略)

「提案実現への願望・意見」に関する記述が8件得られた。14(2)はディスカッションを通して、学生の自主的な取り組みに大学が財政的に支援する「おもしろプロジェクト」の存在を知り、興味をもっている。09(2)はディスカッションを今後に生かしていくことが大切だと述べている。話し合いだけで終わるのではなく、エクササイズ後に行動変容があってこそ本ディ

スカッションが生きたものになるという考えである。24(1)は、自国の大学と比較し「学生たちがもっと声を出せる機会があればいい」と学生が意見を発信していく場の必要性を述べている。30(1)の「外側的な影響は大きいですが、自ら変えればもっと楽しくなる」という意見は、自己の主体性に目を向けているといえる。つまり、大学を楽しむには、まずは自分が変わることが大切であるという意見である。このようにディスカッションを振り返り、願望や意見が出てきたことは、参加者が積極的にテーマについて考えたことの表れだと思われる。

<表9> 「コミュニケーションへの気づき」 カテゴリー

(n=7)

番号	自由記述データ	所属	属性	ラベル
01(1)	他のグループも、他の学生ともっと関わりたいと思っているんだなと気づきました。	日文 4年	女(日) 20代	もっと関わりたい
13(1)	大学を10倍楽しくする方法を考えたが、どのグループも結局はコミュニケーションをとれるようになりたいという方向だった気がした。	社会 2年	女(日) 20代	コミュニケーションをとり たい
03(3)	他のグループの発表を聞くと、どのグループも「人と人とのつながり」をキーワードにして考えていたのかなと思いました。今の山口大学にはこの「つながり」が足りていないのだなと思いました。	日文 3年	女(日) 20代	つながりの不足
09(3)	シェアリングから、人文は縦のつながりがあまり強くないと思っている人が多い気がしました。	英文 3年	女(日) 20代	縦のつながりの不足

(以下3件省略)

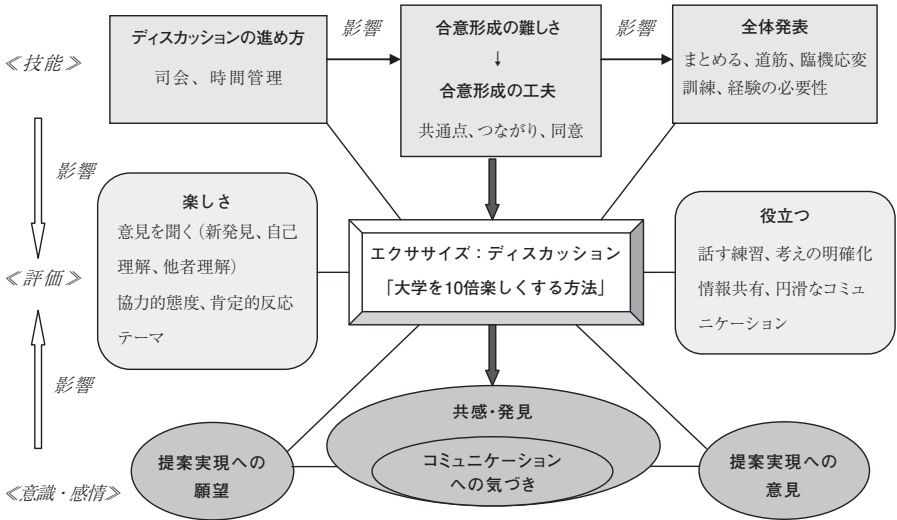
「コミュニケーションへの気づき」に関する記述が7件得られた。01(1)、13(1)は、各グループからの提案を聞いて、「他の学生ともっと関わりたい」「コミュニケーションをとれるようになりたい」という思いをもっている参加者が多いことに気づいている。03(3)は、人とのつながりを求める提案が多いのは逆にそれが足りていないと思っていることの表れではないかと現状を分析している。09(3)は、「縦のつながりがあまり強くないと思っている人が多い」という気づきをシェアリングから得ている。エクササイズとシェアリングによって、参加者の意識の中に潜在的にあった人間関係やコミュニケーションの問題が浮かびあがったと言えよう。

6-4. その他

その他の記述が8件得られたが、紙幅の都合上ここでは省略する。

7. カテゴリーの関連付け

各カテゴリーの関連を<図2>に示す。□内の太字はディスカッションや発表の技能に関するカテゴリー名、○内の太字はディスカッション内容から生じた参加者の意識・感情に関するカテゴリー名、□内の太字はエクササイズの評価等に関わるカテゴリー名を表す。また、細字はカテゴリーに関するキーワード、斜体はカテゴリーの関連を表す。



＜図2＞カテゴリーの関連図

まず、技能に関する各カテゴリーが互に関連している。「ディスカッションの進め方」とは、司会の役割や時間管理のことである。司会はそれぞれが出す意見を要約したり、検証したりしながら、話す順番を調整していかなければならない。また、1人のメンバーが時間を独占することがないように留意しなければ、全員が納得するような合意は得られない。このような態度は司会だけでなくメンバー全員に必要なディスカッションのポイントであり、合意形成に影響を与える。さらに「合意形成の難しさ」が「合意形成の工夫」を促していく。実際、参加者は互いの意見の共通点、つながりを見出し、具体的提案としてまとめるという工夫を試みていた。合意形成がしっかりできていれば、提案内容を明確にした「全体発表」につながっていく。参加者は内容を簡潔にまとめる難しさ、筋道を立てて話す難しさから、訓練、経験の必要性を感じていた。

ディスカッション内容から生じた参加者の意識・感情に関するカテゴリーにも関連がある。参加者は現状の問題を意識化し、互いの意見に「共感」していた。これは、共通点を追求していくという合意形成の過程が影響していると考えられる。共感の内容には「コミュニケーションへの気づき」が含まれる。この共感や気づきから、参加者は提案実現に向けての「願望」や「意見」をもった。これらのカテゴリーは参加者の本音の交流が見てとれるものであり、SGEエクササイズの特徴的な現象といえるだろう。また、エクササイズの「楽しさ」や「役立つ」カテゴリーには、技能と意識・感情の両面からの視点が含まれている。

8. まとめと今後の課題

本エクササイズは、量的評価において、日本人、留学生ともに「楽しい」「役立つ」「積極的」が上位3項目であることから、「学習者が楽しんで活動に参加し、話すことへの不安や抵抗感を

軽減させ、話す力が向上する」という期待にある程度答えることができると評価することができる。しかし、「どのような話す力が、どのくらい伸びたか」については明らかにはなっていない。本エクササイズでは「伝える」「受け答え」は4ポイントを上回ったものの、留学生の「筋道」「臨機応変」「工夫」の評価は4ポイントを下回っていることから、談話能力やストラテジー能力の留学生の自己評価はまだ低いといえる。

自由記述を分析すると量的評価の背景が見えてきた。本エクササイズの「楽しさ」の要因をまとめると、①様々な意見を聞く、②協力的な態度、③他者の肯定的な反応、④テーマの楽しさであることが分かった。①は自己理解・他者理解や認知の修正・拡大につながり、②と③はディスカッションに必要な技能である。さらに「役立つ」の要因をまとめると、①話す練習、②自己の考えの明確化、③情報共有、④円滑なコミュニケーションであった。①②は「話す力を育てる場」として、③④は「コミュニケーションの場」としての有用性であり、本エクササイズがCAの理念にかなっているといえる。「筋道」「臨機応変」「工夫」の評価の低さは、合意形成の技能や発表能力の不足に要因があると考えられる。

カテゴリーの関連付けをしてみると、合意形成過程で共通点やつながりを見出すことが、参加者の共感をより生み出していることが分かった。また、「楽しさ」「役立つ」というエクササイズの評価には技能と意識・感情との両面が影響していた。従来タスクでは、技能を重視し、参加者の感情面は余り重視されていなかったように思われるが、参加者の意識・感情は「話す楽しさ」や「話す価値」につながることから、もっと重視する必要がある。SGEのエクササイズでは、この参加者間の感情交流を重視している。さらに記述に「コミュニケーションへの気づき」が多かったのは、本音の交流を求めていることの表れであり、話す活動にSGEエクササイズを取り入れていくことは、参加者の要求に合致していると考えられる。

今後は、自由記述についてフォローアップインタビューをするなど、データの信頼度をあげていく必要がある。また、エクササイズの中で体験的に学んでいる話すスキルを意識化できるようなフィードバックを検討していきたい。

【参考文献】

- 岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社
 木田真理・小玉安恵・長坂水晶（2007）『話すことを教える』ひつじ書房、p.56
 黄潔（2012）「話すことに関する構成的グループ・エンカウターの実践研究」『エンカウンター研究』第5号、山口大学人文学部林伸一研究室、pp.1-100
 國分康孝（1981）『エンカウンター 心とこころのふれあい』誠信書房、p.3
 國分康孝・國分久子総編集（2004）『構成的グループ・エンカウンター事典』図書文化社
 戈木クレイグヒル滋子（2008）『質的研究方法ゼミナール増補版 グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ』医学書院
 斎藤孝（2004）『コミュニケーション力』岩波書店、p.159
 登村勝也（1999）「学校を10倍楽しくする方法」『エンカウンターで学級が変わる・ショートエクササイズ集』図書文化社、pp.198-199
 林伸一（2008）「構成的グループ・エンカウターの位置づけ」『エンカウンター研究』第2号、

山口大学人文学部言語文化学科日本語文化論コース林伸一研究室、p.94

村上智子 (2012) 「口頭表現クラスにおけるディスカッションの取り組み—合意形成を目指したグループ・ディスカッションの提案—」『日本語教育方法研究会誌』第19巻、1号、日本語教育方法研究会 pp.66-67

<別添資料> ワークシートの内容と記入例

* 以下の内容で、漢字には読み仮名を付し、A 4サイズにしたものを用いた。

◆ 下の質問について、ペアで話し合ってください。

- (1) 現在の山口大学で、こんな点を改善したら楽しくなると思うことは？
- (2) こんな企画やイベントがあったら楽しくなると思うことは？
- (3) その他

◆ グループで、「大学を10倍楽しくする方法」についてディスカッションし、全体に提案したい1つの方法を決めてください。そして、提案できるようにまとめてください。

グループ名
大学を10倍楽しくする方法
提案理由
実現方法

(さかい・さとみ)